

下村康二ギャラリートーク「絵と私」

平成23年7月2日 10:00~11:30

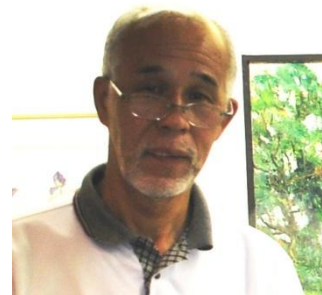
エイブル2階 交流プラザ

おはようございます。

今日は、私の絵に対する思いなどをお話したいと思います。

私は、1950年（昭和25年）に、鹿島市行成の誕生院の近くに生まれました。今年61歳です。

5歳の時右足首を火傷しました。昔、堀炬燵ほりこたつというのがありまして、練炭れんたん炬燵こたつでしたが、その中でマンガかなんか読んでいたとき、ズボンの裾に火がついて、右足首が燃えたんですね。単なる火傷だけだったらまだよかったのですが、足首が成長していないんですよ。短いままで、90度から曲がらないのです。このことが私の一生を左右したと、後で思いました。



保育園の時は、漫画を描くのが好きでした。赤胴鈴之助あかどうすずのすけなんかが好きで、次から次に描いていました。

鹿島小学校に入ってから、宿題は学校でして、家に帰ればすぐソフトボールをしに行っていました。また、プラモデルや模型飛行機を設計図を見ながら設計図通りに作るのが好きでした。特に、模型飛行機は、できるだけ軽く、ゴムをたくさん巻けるよう工夫して、模型飛行機大会に出していました。

夏休みには、まず、絵の宿題を先にしていた記憶があります。工作したり、絵を描いたりですね。

中学校ではバレーボール部に入って、右足が悪かったのでアタックは片足ジャンプだったんですが、結構好きでやっていました。また、祖父が通知表を集めていて、小学校からの通知表があるのですが、中学校の美術だけはオール5でした。

高校の時には、やはり美術がとても好きだったので、美術部に入り、岩永京吉先生と出会いました。先生の指導は、週に1回だったのですが、その1回が非常に待ち遠しくてですね。逆に自主性が育ったと思います。

2年生の時に苦い思い出があるのですが、当然選ばれると思っていた選手に選ばれなかったんですね。非常にショックでした。後ろを向いて涙を流して泣いた思い出があります。でも、先生はよく見ておられたなあと思います。高校3年の時、今度は選ばれるようにと頑張りました。デッサンコンクールで1席を取りました。たぶん、2年生の時に選ばれていたら、ここまで頑張っていなかったかもしれません。この頃の鹿島高校美術部は、先輩の杉光先生が1席を取り、私が1席を取り、後輩が1席を取りました。たまにしか先生が来られない中で、これはやはり何かあったのかなと思いました。私が就職した当時、高校の美術の先生が30数人の中で、私を含めて7人くらいが鹿島高校の出身でした。

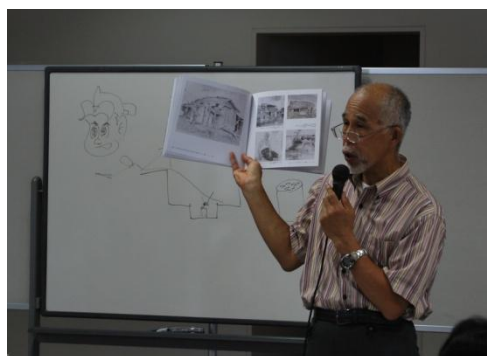
大学は、その頃は一期校、二期校時代ですね。一期校は長崎大学、二期校は佐賀大学を受け、どちらも合格したのですが、佐大の特設美術科の方がよいという評判で、そちらに行きました。

授業料が当時月1000円、電車の定期代が月1200円。それに対して、将来返さなくていい奨学金が月5000円、家庭教師収入が月5000円ありましたので、家にはほとんど迷惑をかけないで大学に行きました。今は、一人大学にやるのに大変お金がかかりますね。

大学では、石本秀雄先生に学び、石本先生がずっと東光会に出品してありましたので、私も東光会に出品しました。

大学時代、鹿島で一時、絵より硬式テニスに夢中になりました。事情があって途中でテニスをやめたのに、時間ができた割には描けない。時間があるから描けるわけではないとつくづく思いました。

大学の頃は、「通勤者」とか、「セミ捕りかごや網を持った夏の子供」「収穫」「玉ねぎ」「二頭の牛」とか描いた覚えがあります。でも、大学時代の作品はほとんどなくなりました。作品を巻いてなおしていたら、ボロボロになったので、燃やしてしまいました。



教員採用試験に合格したのですが、その時の作文の課題が良かった。「私の尊敬する人」でした。私は金子先生を書いたので。当時金子先生は嬉野商高に勤めておられ、誕生院の近くで、「鹿島K教室」といって、高校生や若い人を集めて教えておられたんですが、私も高校2年の時偶然お世話になることになりました。厳しくもあり、面倒見も良い先生だったので、作文の下手な私がすらすら書けたのです。だから合格したのではないかと考えています。

最初の勤務地は金立養護学校の高等部でした。その時、東光展で1席をとったり、美協展で1席をとったりしました。教員になっても描き続けることが大事と先輩方にも言われて、並行しながら描いたのですが、教員になってすぐが大事ですね。描かないと描かないことが当たり前になるし、描けば描くのが当たり前になってくる。いい習慣は早いうちにつけないといけないということで、教員になってすぐから描き始めたから、その後も描き続けることが出来たのかなと思います。

私が所属する東光会の旅行の企画がありまして、イタリア・フランスへ8日間の旅でしたが、それに行きました。やはり外国はいいですね。どこでも絵になるという感じでした。また行きたいと思っています。

次に巖木高校に勤めたのですが、父が突然亡くなりました。トラクターを運転していた時に、若い運転手にはねられてですね。内臓破裂でした。県展では、洋画では落選したのですが、皮肉なことにデザインが三席でした。デザインも遊び感覚で出すようになりました。

次は佐賀西高校に勤めたのですが、43歳の時、日展に久し振りに出したら入選し、県展で一席を取ったりしました。高校には窯があり、授業で焼物をしました。若い時には焼き物にはあまり興味がありませんでしたが、40歳を過ぎると焼物の良さを感じ、焼物が非常に面白くなってきました。焼物の奥深さというか、^{しゅうやく}釉薬の加減でも違うし、適当にした方が結構おもしろかったり、思い通りにいかないところがいいですね。早く窯を開けてくたしょうがない。早く温度が下がらないかなと思うのですが、そんなに早くは下がらない。自分で作ったもので食べるというのもいいですね。ただ、大失敗もしました。素焼きだったから簡単に考えていたと思うのですが、たまたまその日は夕方電源を入れて、連休明けに温度を見たらまだ温度が下がっていないのですよ。真っ青になってしまいました。温度を見たら8000度になっていました。いつもなら800度のところが、〇が一つ多いのですね。生徒の作品が全部ベチャツとなってしまって、まさに「芸術作品」ができました。生徒には平謝りですよ。再度作品を作らせてですね。本当に苦い思い出です。そんな大失敗もしているんですね。

最後の9年間は佐賀北高校の芸術コースに勤めたのですが、芸術コースは、やる気があり能力の高い生徒がたくさん来ているのですね。生徒たちから学ぶことも多く、自分のためにも本当に良かったと思います。

ハーモニカへの挑戦ですが、私は52の手習いです。ある先生が結婚式で突然ハーモニカを取り出して吹かれたのが印象深く残っていたので、「5分でできるハーモニカ」という本を見つけて全くの自己流で始めました。実は、今日ハーモニカを持ってきているので、4曲吹きます。

＜ハーモニカ演奏 「ふるさと」「シャボン玉とんだ」「かっこう」「知床旅情」＞



展示風景（後期）

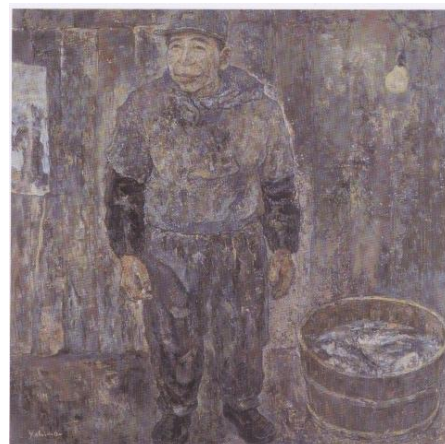
私の絵のテーマ、モチーフ(題材)ですが、いろいろなものを描きました。金立養護学校に勤めまして、養護学校の子どもの「ある日の印象」を描きました。車椅子とか、松葉づえとか、子どもたちと一緒に画面構成をした作品です。

私は小さい頃、祖父母に連れられて中牟田の鮎市に行ったのですが、本場が浜と後で知りまして、浜の方に取材に行きました。

浜の鮎市は1月19日だけですので、次の取材は1年間待たないといけない。待ち遠しい。それで、呼子の朝市の方が毎日あるのでいいかなと思い、しばらく呼子に通いました。「朝市の人」「鮎市の人」を足かけ25年くらい描いていますね。

そろそろモチーフを変えないといけないなということで、花と緑の市の取材に行きまして、4~5点ほど描いたのですが、なかなかうまくいかなくて、また朝市や鮎市の方に戻りました。

次は、つぶれた空き缶をモチーフに描きました。ある日散歩していたら、途中につぶれた空き缶が落ちていて。面白いなあと思って拾って集めていたのですが、それが人間の顔に見えてきたんですね。つぶれた影あたりが目に見えたり、鼻に見えたり、口に見えたり、それで絵の題材にできないかなと思って描いたのが、県展で1席を取り、文部大臣賞を取ったんですね。結構これがおもしろくてですね。私に似た空き缶を探したりですね。「結婚式」



『鮎市の人』60号

だとか、「ノーモア広島・ノーモア長崎」とか、空き缶を通していい絵が描けないかということで描きました。見る人によって、いろいろな見方ができると思います。



展示風景（前期）

「廃屋」シリーズですが、このきっかけは、青木繁記念大賞という公募展に、出しても出しても落選だったんですね。それで、どうせ落選するなら抽象画などいろんな新しいことをやってみようと挑戦しました。これは墨で描いているのですが、まず、パネルにペンキで黒に塗っているんですね。書道用の和紙で皺を作り、ボンドでべたっと張ります。古い感じが出せないかと、偶然こういうやり方を発見しました。全くの偶然です。落選したからこういうのができたのかなあと

思います。こうやって初めて描いた作品が、大変厳しい青木繁大賞展で入選どころか奨励賞をもらったんですね。これをきっかけに墨で描いた作品も時々描いています。廃屋シリーズも油で描いたり、アクリルで描いたり、墨で描いたりしています。これは、落選がおこした奇跡だと思っています。

技法、材質ですが、ほとんど油絵の具です。たまにアクリル、水性で乾いたら溶けないというのがあります。油は乾きにくいので、上から塗るとき速く乾いてほしいときもあるのですが、アクリルはすぐ乾くので、時間が無いときはアクリルだととどんでん描けます。ただ私には体質的にあまりあわないかなと思います。水墨、水彩、ミクストメディア（いろんな材料を使って描いたもの、でも何で描いたのかはよくわからない）、その他鉛筆だけで描いたりとか、今年の青木西日本美術展は一席が鉛筆画でした。鉛筆だけでも良い絵が描けます。



『廢屋』50号

私が出した主な公募展出品はここに書いているようなものです。西日本美術展と青木繁記念大賞公募展が一昨年からいっしょになって青木繁記念大賞西日本美術展と変わりました。これが今年で2回目となります。おかげさまで1回目も2回目も入選したのですが、自分で言うのもなんですが、日展以上に審査が厳しいと思います。

私は公募展出品や個展を目標に制作してきました。忙しいと自分に負けてしまうんですね。私はこのような公募展出品を目標にだいたい年間5~6点、2ヶ月に1枚のペースで100号前後を描いてきました。私の中での締め切りは、展覧会の搬入日です。途中描きの方が案外おもしろかったりする場合もあるんですね。青木繁の『海の幸』を見てつくづくそう思います。最初に描いた線が残っていたり、人物の輪郭線がそのまま残っていたりします。あれをそのまま描き続けていたらどうなるか、私はつまらなく普通の絵になっていたのではないかと思いますね。本人がわざとやめたのか、やめざるを得なかったのか、真意は分かりませんが、僕はあそこでやめてくれてよかったなあと思います。元気があるというか、勢いがあるというか、そういうのをつくづく感じました。

公募展落選が次の制作のステップになる。入選もしましたが、落選も多いのです。悔しいけれども、それが、このままではいかな、色を変えてみようかな、下地の工夫、キャンパスの裏に描いてみようかな、地塗りの色を変えてみようかな。一度、赤で絵を描いたことがあるのですが、東京の美術館に見に行って、もう二度と見たくないと思いました。自分に赤は合わない。その赤を地塗りに使ったら、所々に赤が残っていい味を出しました。真っ黒の地塗りに変えたこともありました。絵具の塗り方を変えることでまた絵が変わってきます。

テーマを思い切って変えてみる、材料を変えてみる。落選はきついけれど、そこで終わりではないから、落選は勉強だと思って、絵が変わるきっかけだと思って、描きました。

最後に私のモットーですが、相田みつをの「一生感動、一生青春」が好きで、それに自分なりに付け

加えて、「一生健康、一生勉強、一生挑戦」としました。

「一生感動」 私は、よく感動します。ちょっとした何気ないところに感動します。ピアノ、スポーツ、パソコン、テレビを見ても、よく映るなあと感動します。壁のシミひとつにも、形が面白い、色が面白いと、ちょっとした何気ないところにいいところを見つけて感動します。

「一生青春」 年だけは隠せません。私は今61歳なんですが、ふけて見られることが多いですね。45歳くらいから髪が薄くなってきて、隠してたんですね。そしたら、東京に行ったときにビル風にあいまして、これはもう隠せないと思い、思い切って坊主にしました。坊主にしたら、どんなに風が吹いても堂々と歩けるんですね。これで自分の気持ちが大きくなりました。年だけは仕方ないけれど、気持ちだけは若くありたいと思っています。

「一生健康」 自分の体は自分でしか守れません。いろんなことに注意しないといけないと思ひまして、今、散歩をしています。私は朝が早いんですよ。朝は3時半、遅くても5時半ですね。今朝も4時に起きました。寝たのは11時過ぎですね。教員を辞めてからストレスがなくなったのか、熟睡できます。食事にも気を使っています。食事の最初に野菜を食べるようにしています。キャベツの千切りが上手になりました。

私は、絵を描いていて本当に良かったなあと思ってから思います。定年過ぎたら何をするかと皆さん迷われると思うのですが、何でもいいんですね。することがあるというのがいいことですね。私は絵があったから本当に良かったなあと思ひます。手さえ動けば一生絵は描けると思っています。

「一生勉強」 私は読書がなかなかできていなかったのですが、55歳の頃、「本は一度に10冊読め」と書いてある本に出会いました。10冊までいなくても、5~6冊あちこちに置いておいて、気が向いたときにこの本、また気が向いたときにあの本というようにすると、案外できるんですね。今の目標は、月5冊です。結構大変ですが、何とかノルマを達成できるよう頑張っています。

各種展覧会を見に行こうと思っています。見に行くのが自分の勉強になりますね。市民劇場の会員にもなりました。演劇もいいですね。

「一生挑戦」 今後も公募展出品を目標に、個展も開きたいと思っています。陶芸は、窯を持ちたい。

書道、絵と書の間のような書を書きたい。テニスも、月2回くらいはしたい。ギターもやりたい。旅行も、日本、世界含めて取材旅行をしたい。

今は、朝の散歩をして、いい花に出くわしたら、すぐ描きに行けるというのがいいですね。やめてよかったなと思ひます。今回、展示している「赤門」は、6月24日に4時間ほどかけて描いたのですが、半日で真っ黒に焼けました。

「絵の教室」はまだ4人、気楽なもんです。最初は30人くらいと思っていたのですが、少ない分自分の時間があるので、いいかなと思っています。年間絵具代も50~60万かかるので、その分くらいはと思っていたのですが、ポチポチやっていきたいと思っています。



『赤門』15号

<質疑応答>

○先生の絵は、スーッと通り過ぎてからも何か気になって立ち戻るような感じがします。色彩的にも地味というか、そういうのが何か体質的にも合っておられるのですか？

→ 私は、大体渋い色が好きですね。性格は変わらないですね。地味な色が好き。グレー調が好きなんです。パーっと派手な絵ではなく、見ていてじわーっとくるような絵を描きたいなと思ってますね。グレーで始まってグレーで終わったかなという感じがするくらい、グレー調の渋い色が好きです。

○先生はたくさんの絵を描いておられますが、描きたいから描くのですか？ 買ってもらいたいから描くのですか？

→ 私は、絵は売る目的で描いてはいけないのではないかなと思っています。

大作は、展覧会に出品して、自分の勉強を含めて、認めてもらいたいという気持ちもあるし、自分の感動をいろんな人にも感じてもらいたいという気持ちで描いています。

小品は、風景とか、花とか身近なものを書いているのですが、欲しいという方もいらっしゃるし、絵を描いたり、展覧会に出すにも結構経費がかかるので、売れたらいいなとは思いますが、売るのが目的で描いてはいないですね。

小品は別として、大作は 100 号前後のものが 120~130 点くらいはありますが、私が手元に残したいと思っているもの以外は、欲しいと思ってくださる方に無料でお譲りしたいと思っています。